

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

Attack on Titamon

【作者名】

柳之助

【あらすじ】

ついにオーガモンに究極体が出たというので。

不定期更新

ビギーング・レジョン

それは一つの伝説の終焉だった。

そこは電子世界^{デジタルワールド}の辺境地域。特に何もない荒野で、周囲にはターミナルを始めたとした施設など一つなく、近づくテジモンすら滅多にいない場所だった。

そんな辺境でその一体のテジモンの決着は生まれていた。

緑と青白だ。

全身が隆起した筋肉で覆われていて、その上からも鋼と何かの骨で作られた鎧を纏っている。左手には身の丈ほどもある巨大な骨剣が。もう片方は青と白の装甲、細見のシルヒットに同色の鎌のよつた武装を手にしていた。緑は三メートルほどの巨体で、青白はやや小さく二メートルほど。

タイタモンとディアナモン。

それが一体のテジモンの名だ。共にテジモンとしては究極体、それもその中でも最高位。ディアナモンはデジタルワールドでもその名を轟かせるオリンポス十二神族の一角であり、それと同等に戦えるタイタモンもデジタルワールドでも最上位の実力者と言つてもいいだろ。

その一体の戦闘だからこそこの誰も何もいらない場所は蹂躪し尽されていった。何もなかつた場には地割れと洪水と猛吹雪が一遍の訪れたかのようになつた。大地はタイタモンの骨剣で亀裂が刻まれ、その亀裂にディアナモンが生み出した氷で氷河になつていて。どこもかしこも衝撃痕か氷漬けになつている場所ばかり。これらが凡そ数キロ、広ければ数十、数百キロ単位で広がっていた。究極体同士の決戦とはこれだけの被害がある。

しかしその戦いにも幕が引かれていく。

どちらも満身創痍という他になかった。それぞれの装甲は砕け、崩壊し、その下の肉体も血に染まって無事な所は欠片もない。タイタモ

ンの各所のある角はほぼ全てが折れ、デイアナモンも刃を彷彿させる装飾も悉くが原型を保っていない。骨剣も半ばまで折れて、デイアナモンの鎌もまた

膝を折ったのはタイタモンだった。

「……つ、あ、が……」

「もう終わりにして、タイタモン」

膝をつき、呻き声を上げるタイタモンにデイアナモンは言へ。

「我々へ戦いを挑んで何になるという。例え私を滅ぼして、その先に待っているのは修羅の道だ。いつか、絶対に終わってしまう。こんなことをして貴方に未来などない」

諭すように、さりには憐れみさえ載せた言葉で語り掛ける。

「……黙れ」

それでもタイタモンは吐き捨てる。最早彼に戦う力は残されていない。からうじてデジコアは無事だがそれ以外のデータは壊滅的だ。ディアナモンとの二日三晩にまで及ぶ戦闘の果てに全ての力を使い果たしていた。

しかしそれでも、その瞳から力は消えない。

「俺は、貴様らを殺すんだ……ぶち殺して、ロードして……てめえら全員残さず殺さねえといけねえんだ……」

声に力はない。しかしありつけの怨嗟が、戦う力を失つてもその執念は消えない。

それこそがタイタモン全てであるから。

オリンポス十二神族を滅ぼすためにこの深縁の鬼神が存在するのだ。

故に言つまでもなく、

「残念だ」

ディアナモンは最後の一撃は放つ。背に残つた最後の突起を引き抜く。それは氷結の概念^{デリタ}の結晶。最後の残つた一矢だからこそ込められた力は膨大だ。今にも折れそうな鎌 クレセントハーケンにそれを番える。それこそが彼女たち、ディアナモンの必殺技。ありとあらゆる存在を凍結させる絶対零度。止めの一撃ととしてはこれ以外には在りえない。

引きぼれられるだけで周囲に氷の波動は満ちていく。

「……くそったれが」

全身を凍らせていい、自身を滅ぼすであろう必殺技にもタイタモンは目を背けない。ただ邵々しげに睨みつけるだけだった。

『アロー・オブ』

『アルテミスッ!!』

「ついで一つの伝説は終焉していく。

牧野巧斗は友達が少なかつた。

コミュ障という訳でもないし、誰かに話しかけられれば相応の受け

答えや会話をする。電車でお年寄りを目にすれば席を譲るし、道に迷っている外国人相手ならば片言の中学生英語で、それでも通じなければ身振り手振りなりでの対応をする。

親戚の叔母がファッションモデルなんかしているので、たまに服装を見繕つてもらつたりしてるので服装が悪いわけでもない。目つきはかなり悪いが、顔付 자체は問題ないはず。

けれど圧倒的に友達が少ない。

何がいけないんだろうなあとたまに彼自身考えないでもないが、特に何か自分を変えようとしているわけでもない。友達は確かに圧倒的に少ないが数人とはいえることはいるのだ。彼らを親友といえるのならばそれでいいのだろうと巧斗は満足していた。

よくよく考えれば三つほど上の従姉もかなり無愛想で友達も数人しかないかつたはず。そのくせ彼氏がいるのが巧斗からしたら謎だつた。一体あの無愛想な人間のどこに惚れたのか不思議過ぎる。未だに会つたことないというか、従姉が会わせてくれないのだが。ともあれ彼には友達が少なくて、だからこそ少ない友達のことは非常に大事にするのだ。

だから、

「じよおタクト。嫁さんいなくて寂しいのか、ん？」

「黙れ喋るなふざけたこと言つな」

幼馴染の月冴佐奈が三日間学校に来ないが、ただ友達として心配しているに過ぎないので。

「はつはつは。この三日間アホみてえに拳動不審の奴が言えた言葉かよ。出産待ちの旦那かつつの」

「……いいか、俺とアイツはなんにもねえってお前が一番よく知ってるだろ?」

「知ってるぜえ？ サナはお前さんにしてこんで、ヘタレのお前が逃げてるんだろ」

「……」

口にしじらいうと当たり前のようこののは佐奈とは別の幼馴染の少年。金髪を逆立て、中学の夏服を着崩したのは篠谷凱。佐奈と同じく巧斗とは幼少の頃からの付き合いだ。巧斗の数えるほどしかいない友達の一人だ。中学から帰宅するのはこの二人組が基本だ。基本なのだが、その中の一人が三日前から学校に来ていなかつた。家にも帰つていないというのでなにか事件に巻き込まれている可能性もないでもない。

「心配だよなあ。学校終わつてすぐに秋葉原走り回つてるもんなあ。いや、実際色々問題だよな、あそこの親何考へてるんだって話」

「考えてねーんだろ。放任主義といふか、どつちにしたつて帰つてくれるつて信じてるんだろ」

彼女の疾走は珍しいことではなかつた。放浪癖とでもいうのか幼馴染の少女はよく消えたり現れたりするのだ。その旅に巧斗が探し回つて、凱がおちょくつて、ひょっこり佐奈が帰つてくるというのが幼いころからの恒例行事だつた。

「俺が一、三日開けても全く探してくれねーのになあ」

「別に。アレも性別的に見れば女なんだから、友達としては心配しないわけにはいかないだろ」

「シンボル」

「黙れ」

殴りかかりたいが道の真ん中で他にも歩いている人間がいるので我慢する。オタク系や電器製品目当ての人間でじつた返す秋葉原の街とはいえ中学生の喧嘩とか在れば当然目立つ。よくテレビで出るような街並みからほど騒がしくはない、比較的静かな街並みだがさすがに自重する。機会があればぶん殴るが。

「んじゃあなタクト。また明日。佐奈帰つてきたら今回くらいはキスの一つでもしてやれよ」

「地獄に落ちろ」

分かれ道に手をひらひらと振りながら去つていく凱の背中に吐き捨てながら、巧斗は彼と別れた。普段ならば家まで十分ほどは佐奈と一緒にだつたが今日は一人だ。その幼馴染を探しに今日も巧斗は街の各所は巡るつもりだ。

「……キスつて。拳骨の間違いだろ？」

呟きながら足を進める。一度荷物を置いて着替えたり、隣の佐奈の家に帰つているか確認する必要がある。だから気持ち、速度を高め、

『　　い』

「　　なんだ」

何かの声を聞いた。ノイズ染みたかされた音。ともすれば空耳かのように聞き流してしまいそうな微かな音を巧斗は確かに耳にしていた。周囲を見回すが特別変わったようなものはない。数人の歩行

者、車道。いくつかある街路灯。点滅しているがそれほど珍しいことでもないだろう。スマートフォンの着信音だつたかとポケットから取り出してみれば、

「……どうなつてんだ」

反応がない。というよりも、液晶画面に光が付いたり、止んだりしている。街路灯の点滅のような現象だがまさか故障だろうか。一月ほど前に買い換えたばかりの最新機種なので軽くショック。

『　れ　い　』

「……」

ノイズが再び響いた。気のせいなどではない。どこからか聞こえてくる不思議な声。というのはオカルトチックにもほどがあるが、そういう類のものを巧斗は数年前に経験している。だからそれを見過ごすことなどできなかつた。あの時のようなことが再び起きるなんて絶対にあつてはならないと思つ。

「……くそつたれ。ルキ姉に頼るのは御免蒙るぞ」

ノイズの方へと足を運ぶ。何かの思念染みた声は、ずっと同じようなことを繰り返している。妄執染みた狂氣を感じさせる声。なのになにも消えそなが細いものだ。十分、一十分と歩き続けていく、都市の中心部からはどんどん離れていく。学校が終わつた時点で五時過ぎだつたが、夏故にそれほど暗くなるわけではない。進んでいく途中にやたら渋滞や事故があつたがきにしていられない。

行き着いた先は一つの市町村には大体一つずつくらいはありそうな緑地公園だつた。都市化が進んでいるというか東京の街にせめてものお情けと言わんばかりにある自然地域。お年寄りや子供の憩い

の場所だ。

「……」つかか

ノイズは少しづつ明確になっていき、既に巧斗は言葉を認識していた。

緑地公園の田玉というべきか、比較的広めの森の中に足を踏み入れていく。時間を確認しようと思つたスマートフォンは完全に機能を停止していた。最早諦めに近い感情で森を進んでいく あつそりとそれを発見した。

「……まじかよ」

一メートル近くはあるであろう緑の田玉と白髪。漂う鉄臭さと流れる赤い液体。太い木に背中を預け、といつよりも倒れこんでいる。およそ地球上には絶対存在しないような鬼。
ああこれは言つまでもなく、

「……『デジタルモンスター』

確かオーガモンとかいうデジモンだった。従姉の影響でそこそこ詳しいつもりだ。

「……終われない、ね」

完全に意識を失っているが、確かにあのノイズはそう言つていて、このオーガモンから発せられていたのだ。何が何やら解らない。だから巧斗がしたのは、

「おい、生きてるか？」

そんな至極普通極まりない声を掛けることだけだった。

こうして新たな伝説は始まつていく。

トーキング・ウイズ・オーガ

結論から言えばオーガモン（仮）は生きていた。巧斗の勘違いではなく（仮）でもなく木に身を投げ出していた鬼人はやはりデジモンのオーガモンだつた。

デジモン。正式名称デジタルモンスター。何年か前のカードゲームとして一世を風靡していた。実際巧斗も幼いころは従姉の影響で少なからず触れていたことがあった。けれどあくまでそれは子供向けのカードゲーム。遊びの域を出でないただの空想でしかなかつた。

それら決定的に変わつてしまつたのは数年前、東京全域で発生したデ・リーパー事件。その名の通りにデ・リーパーとかいう訳のわからん存在に立ち向かつたのが政府の組織、そして空想だと思われていたデジモンとティマーと呼ばれる子供たちだつた。なにやらおどぎ話の騎士とかでっかいロボットか尼さんとかライダーほいのが東京を中心で跳梁跋扈し、なにがなにやら色々あつて解決してはいた。その直前にも東京の街にでかい馬とか猪とかが出現したという事件もあつたりしたし。

その時はまだ巧斗はかなり幼かつたので、何があつたかはあまり知らないのだがかつての恐怖は覚えている。何を隠そうそのティマーとか言うのが従姉の牧野留姫だつたりするから常人よりは耐性のよくなものがあるとはいへ、本人からデジモンの素晴らしさを語つてもらつた。子供ぽいと言つたらぶん殴られた。やはりあの事件におけるデジモンの強大さというのは忘れがたい。

だからこそこのオーガモンと遭遇し、執念染みたノイズを耳にし、自分なりに最大限の警戒をしていたのだが

「うまっ！ なんだこれうめえ！ くそうう、人間でいうのはなんていいもん食つてたんだよチクショウ！ おかわりだタクト！」

こうして目の前で一個百円のハンバーガーを嬉々として食らいつ

く縁に鬼には恐怖も何も感じなかつた。

「……もうねえよ」

「なにい!? どうにかならねえのか!?

「……いや、また今度ならなんとか」

「そつかそつか！ ジャまた持つて来いよ！」

やたらフレンドリーだった。

おかしい、なぜこうなったのだと巧斗は首を捻る。

ボロボロの生死を確かめたら微かにだが息はあつたのだ。血を流し、意識は朦朧としていたが、それでも僅かな反応があつた。それこそノイズの正体、『終われない』といつ^{いつ}執の正体だと巧斗は確信し、息をのみ、

『……腹減つた』

そんな咳きが耳に届き思いつきりこけた。具体的にはオーガモンの鳩尾に脳天めり込むような感じで。ソレのせいでオーガモンは絶叫と共に覚醒し、すわ戦闘、というか一方的な苛めが発生するかと焦つたが出てきた言葉は変わらずに空腹を訴えるものだつた。
なんというか昔のルキ姉の恐怖話に色々文句言いたい気分だつた。絶対あの人俺をビビらせるために物騒な話しただろつ。

ともあれ流石に放つてはおけないし、話も聞く必要があるのでオーガモンの空腹を満たすために近くにあつた全国チヨーンのハンバーガーショップへと走つた。そこで一個百円の極めてプレーンなハンバーガーを野口分、つまりは十個も買ってオーガモンに渡したのだが一瞬で食い尽くされてしまつた。見た目からして大食いなのだろうと思つて大量に買ったのだがさすがに驚く。中学生には千円はそこ

そこにお金なのだ。

「まあ。まあ仕方ねえ。当分俺は動けないから、できれば早めに持つてきてくれよ。 次は百個くじこ

「無茶言つたな。とこつか、一応ハンバーガー十個食つたのにまだ動けないのか？」

どういう構造をしているのか表面的な傷は消えていた。それでもオーガモンは最初に気絶していた場所から動かないままだ。

「ガワははとつあえず修復したがデジコアが損傷したまだからな、当分動けねえ。ゲートも近くにないし、どうじょもねえんだよ」

「あ、そう。まあそこらへんは俺は知らんけど……お前、なんでこんなところなんだ？ デジモンだろ？ デジモンはデジタルワールドとかこう世界について、今はそつ簡単にゲートは開かないって聞いてたんだが……」

「くわしいな、てめえ。その通りだぜ。なんで俺がいるのかっていうとそれはだな」

「おひ

「……

「……

「ええー

「……あれ、なんでだっけ？」

大丈夫かコイツ。凄い怪我だから頭打つたのか。元からだつたらどうしようもない。なんとなくの勘だがこれは元からアホな気がする。できれば外れてほしい予想だつたのだが、

「あっれー？ なんで俺こんな怪我してるんだ？ というかなんでリアルワールドとかいるんだ？ あっれー!? どういうことだよ巧斗！」

「知・る・か」

なにやら頭を抱えだした緑色の鬼は頭大丈夫か。大丈夫じゃないな。アホだコイツ。

「やれやれ……」

嘆息しつつ、スマートフォンを取り出す。結局完全に停止したままだ。餅は餅屋ということでできるならばルキ姉に連絡をとつて対応策とか聞いたかったのだがスマートフォンが壊れているならば連絡のつけようがない。このご時世公衆電話とかめつきり数を減らしているので探すのも一苦労だ。

それにこのオーガモンを放つておくのもまずい。

今は動けないとしても、いきなり動けるようになるという可能性はないわけではない。もしこのテジモンが街を練り歩けば間違いなくパニックだ。それだけは避けたいと思つ。

「なあ、どれくらい動けそつだ？」

「解んねえよ。第一何故かデジコアが八割近くイカれてるんだそう簡単にはいかねえって。多分、俺が色々覚えてねえのもそのせいだな」

「それは大変なこつで。あー、ヤツすつかなあ」

「ハンバーガー買ってきてくれ」

「だからまた今度だ」

「ちぇー」

強面で口びるをとがらせるな気持ち悪い。

そうやってオーガモンと会話していたら大分暗くなってきた。時計がないので正確な時間は解らないが、夏で暗いということはかなりの時間だろう。それにデジモンの遭遇というイベントで麻痺していったが気温も相応に高い。制服にかなり汗が染みていた。巧斗の家は門限とかあるわけではないし、佐奈を探すのに夜遅く街を探索していくからうるさく言われるわけではない。それでも、なるべく早めに帰ったほうがいいのは確かだ。もしかしたら今この瞬間にもひょっこり佐奈が帰つて来ているかもしれないのだから。

「……オーガモン」

「お？ なんだ、やっぱハンバーガー買っててくれる気になつたのか？」

「ちげえ、しつこいや。……いいか、俺は今日は一端帰るから。明日また来て、デジモンに詳しい人連れてくるから、ここで大人しくしておいてくれないか？ ハンバーガーは明日また持つてくるからだ」

「おお、いいぞ」

意外にあっさりと受け入れてくれた。

「ガハハ！　どうせ動けねえからな。ハンバーガーがまた食えるなら文句ねえよ！」

「……そつか。それじゃあ、な」

「おひ、また明日なー！」

本当にデジコアとやらが破損しているのか妖しいほどに元気なオーガモンの声を背にしつつ、森から出ていく。来るときはやたら長く感じていたが、アレのキャラを知つて緊張感が消え去つたらしく体感時間ではすぐに外に出ることができた。湿氣が少なからずあつた森の中に比べれば大分涼しい。

「あー……、いろいろ面倒になるなあ……」

「デジモン。まさか実際に会つて話すことになるとは思わなかつた。凶暴な性格ではなかつたとはいへ、もしも好き勝手に暴れるデジモンだつたと思うとぞつとする。

というか政府の組織とかは動かないのか、と巧斗は首を捻つた。確かにあの事件前とかにこつそりでてたデジモンはなんとかという組織が出現やら対処やらを管理していたといつ話だが、今回の場合はそれがないのか。まさか数年たつたから組織そのものがなくなつたわけではあるまい。

「つて、考へても仕方ないか」

所詮自分はただの中学生だ。従姉は「デジモン関係では色々すいいらしいけれど自分はただのガキでしかない。速めに帰つて彼女に連絡してどうするべきか聞いて、自分は放浪癖のある幼馴染の心配をしていればいい。

「さて、あのバカは帰つて来てるかね」

ゲット・ホーム

「あつちこ……」

オーガモンのいる緑地公園から家への帰り道。オーガモンのノイズに対して自分がかなり緊張していたことを実感していた。日本特有のやたら高い湿度に夏の高気温のせいで汗が噴き出て、シャツに張り付いて鬱陶しいことこの上ない。来るときにも同じ道のりを来たはずだが、あの声に集中していたせいかほとんど暑さを感じていなかつた。森から出た時は開放感があつたが、それも慣れてしまえば普通に暑い。

「明日もしの往復しなきゃいかんのか……」

夏場に片道一時間は地味に辛い。巧斗は暑さが特に苦手といつてはいるが、それにしたつて人並みに苦痛に感じるのは、いや、道のりだけではなくあの森の中のことを考えれば、

「憂鬱だ……」

だからといって放つておくのはまずいのだが。ため息を吐きつつも、家の道を。

「タクトオ、オオー！」

「ぐぇつ!?」

横から衝撃と声があり、巧斗は思わず変な叫びを上げていた。

「ビーハ行つてたのさあ、探したんだよ？」

「……それはこっちのセリフだぞ。あと離れる、暑い」

「えー、いいじゃん役得でしょ？」

そんなたわけたことを言いながら巧斗にしがみついてたのは一人の少女だ。鮮やかな青みがかつたセミロングの髪と大きな瞳。ホットパンツと赤いタンクトップの上から薄手の灰色のフード付きパーカーを羽織っていた。

月冴佐奈。

篠谷凱と同じく巧斗の幼馴染。放浪癖持ちの変わった少女。巧斗に対してのスキンシップが過剰気味なのでそこらへん巧斗は困つてたりする。基本薄着や露出度高めの服だし。同じ年の中一の割には発育がいいといのも無関係ではない。

「それで？ タクトがこんな時間に出歩いているのは珍しい。なにしてたの？」

「……別に。お前じゃ、今回せまいにまつつき歩いてたんだよ、三田もよ

「まあちょっとね」

「そうかい……とにかく離れる、歩けない」

「はいはい」

佐奈を離しつつ歩き出す。

「あ、おいでいかないでよ」

隣に彼女が並ぶ。真横の彼女の距離は変わらずに近い。それについては何も言わずに歩みを進める。

「なあ」

「なに?」

「お前ついでデジモン好きだっけ」

「……」

「サナ?」

「ん、んー、なんでもない。デジモンかあ、最近流行ってないけど。どうしたの? ルキさんの影響?」

「いや……ふと思つ出してな」

「ふうん、あんまりこの記憶はないけどねえ。ほひー一組の賀田さんとか完全トライウマになつててデジモンとこう単語にやれども反応しちゃうらしくじゅん?」

「だれだそれ」

「あはは、巧斗は相変わらず友達いないね。まあボクがいるからいいんだけど」

「……」

「言いくくこと」をほつきひとつと言つ奴がここにもいた。否定できないのでスルーする。友達がないのが巧斗のキャラなのだ。考え

ると鬱^{うつ}になるとナビ。

「それで『トジモン』か。ボクは結構好きだよ。タクトは？ ルキちゃんが結構話誇張してビビりさせられてたって言つてたけど」

やつぱりか。しかし困つたことに彼女に口答えした場合ぶん殴られるか蹴り飛ばされるかのどちらかなので何とも言えない。佐奈の前で言つても告げ口されるだろつし。
そして『トジモン』が好きかどうか。

「んー」

少し前ならば、従姉のせいで若干苦手と答えたかもしれない。けれど、つい数十分前まで一緒にいたオーガモンのことを思い出す。あんな強面^{きょうめん}でありながら、にやけ顔でハンバー^{ハンバーガー}に喰らいついていた縁の鬼の姿を。

「……まあ、別に嫌いじゃない」

「そつか！ それはボクとしても嬉しいよ」

「なんでお前が喜ぶんだ」

「ボクが好きなものがタクトも好きつていうことならそれは嬉しいことだよ」

「好きとか言つてない」

「あはははは」

何故笑われた。

せつやつて腹の立つ佐奈の笑みを向けられながら家にまでたどり着く。牧野家と円沢家は隣同士だ。

「それじゃまたあとでね」

「ああ」

少しの別れの言葉を告げて、互いの家の中に入る。

「ただいま」

「おー、お帰りー」

玄関で靴を脱いで帰宅の声を上げていたら、奥から聞こえてきたのは母親の声だ。リビングでテレビを見ていた。

牧野玲子。

巧斗の母で妹に牧野ルミ子がいる。茶髪を背中まで伸ばし、母親ながらも姿勢が整っているのは解る。ただし巧斗以上に四元が悪いのだが。

「父さんは？」

「まだ仕事。なんかここの信号機とか電器製品がぶつ壊れたらしくてねえ。なんかサイバーテロかもってことだからそのせいで今日は帰つてこれないって」

巧斗の父である牧野章斗は刑事で、そつこないのせいで帰りが遅くなることはよくある。だからそれにはあまり気にせず自分 스스로マートフォンを取り出す。

「お、動くな」

少し前まで電源すら入らなかつたが、今はちやんと動く。母親もテレビを見ていることだし、不調は今の段階では治つたのだしさ。

「江北ですかね？ 今すぐ食べる？」

「ん、ちょっと後でいいや。三十分くらいあとで」

「おーーりーー」

途中洗面所でタオルを引っ掴みつつ、一階に上がり自分の部屋へと戻る。ベッドに机に本棚。押入れが一つと殺風景な部屋だ。唯一珍しいのが小型とはいえ液晶テレビがあることか。いくら趣味がなくてもテレビを見ていれば時間を潰すのは簡単だ。

「えっと、ルキ姉は……」

電話張から彼女の電話番号を取りり出す。電話を掛け、

「……でないな」

返つてくるのは機械的なシステムアナウンス。まあでないのは仕方ないと思いつつ、一度部屋着に着替える。タオルで汗を拭いて、再び一階へ。洗面所へ制服やタオルを放り投げつつ、リビングへと戻り、

「母ちゃん、おばさんの家の電話番号ってなんだっだけ」

「電話のとこのメモにあるわよ

「ありがと」

今度は出た。

「あ、おばさんタクトだけど」

『あらー久しづびりねタクトちゃん！ どうしたの？ お正月振りじやない！』

常にパソコンへの高い叔母の声を聽きつつも、

「ルキ姉いる？ 携帯に電話したけど繋がらなくて」

『あールキちゃん？ それがねえ、二日前から帰つてなくてねえ』

「……ほととぎ？」

『そーなのよ！ それにルキちゃんの彼氏ちゃんととかお友達も家に帰つていないうつこなのよ！ もー心配心配で！』

「……それは」

留姫とその彼氏だけというならばまあ解らなくもないが、他の友達も一緒になると僅かな違和感がある。それに巧斗は留姫の男を知らないが、ルミ子は知つていいのだろ。あのいい加減な叔母ならば旅行とか言つても止めたりせず、寧ろ推奨しそうだし。

「どれくへりこ帰つてないの？」

『二田よー、全くあの子は小さい子から変わらないのよねー。まあ昔からよくあつたと言えばあつたことだし、大丈夫だとは思うのだけど』

「三日……」

佐奈が姿を消していたのも丁度三日前だった。同じ時期に留姫やその友人も一緒に消えた。

「……」

『ちよつとー？ タクトちゃんー？ 聞こえている？』

「あ、ごめん。ありがと、ルキ姉帰つて来てたら俺が連絡してきて伝えて」

『まつかせてー。タクトちゃんも連絡来たらお願ひねー！』

電話が切れた。受話器を置いたら玲子に声を掛けられた。

「なに、どうしたの？」

「なんかルキ姉が三日前からどつか行つてるらしい。その友達も一緒に」

「へえ。まああの子なら大丈夫じゃないのー？」

我が母ながら実に軽い。まあ大丈夫だらと思つのは巧斗も同じなのだが。あのテ・リー・パー事件で狐巫女ぼいのに変身して色々無双していくのは忘れない。ああいつのがあるから、ルミ子も警察に捜索願を出すほどには心配していいだろ？

いやそれよりも。

「……三日」

佐奈と留姫とその友人たちが同じ時期に姿を消した。
それはつまり、何らかの繋がりがある

「……ないな」

あるはずがない。

佐奈の放浪癖は昔からのことだ。それに佐奈だつてちゃんと帰つ
てきているのだ。だから何の関係もない。ただの偶然だ。
話を聞くまでもない。それに第一聞こいつと思えば、常に顔を会わせ
ているのだからすぐに聞ける。だから焦ることがないと巧斗はそう
思った。思い込んだ。

言葉に表しにくいけれど胸に残しつつ。

「あ、うん、食べるー？」降りてきたつてことば「また食べるのー？」

「あ、うん、食べる」

ボーイズ・アンダ・オーガ

オーガモンとの出会いから一夜明けてついでに田も登つて放課後。授業は全て終了し、巧斗、佐奈、凱の三人が当然のように集まって家に帰路に付こうとした。

したがしかし、

「カイと少し寄るところがあるから、サナは先に帰ってくれ」

「そんな!? タクトはボクよりもカイをとるの!? まだよ男同士なんて! 非生産的だ!」

「脳みそふやけてんのか」

「わはははははははははは…」

佐奈は割かし本気で顔を青ざめ、巧斗は額に青筋を浮かべ、凱は大爆笑した。教室の中だったのでクラスメイトから白い眼で見られたが気にしない。いつものことだし。巧斗は知らないことが周囲から変人二達とかそんな微妙に捻ったかどうかの呼び方で呼ばれていたりするのだ。

ちなみに佐奈と凱は当然のように知っていた。

「それで? 嫁さん放つておいて俺ど二人に行こうっていうんだ?
……先に言っておくが俺はノンケだぞ」

「ぶん殴るぞテメェ」

「はいはい、冗談通じねえなあ。まじでどこに行くんだ?」

「……もう少し言つてからな、三十分以上は歩く」

「ちえー、ボクは完全除け者かい？ いいさ、今度の休みはタクトはボクと買い物だよ。拒否は認めないから」

唇を尖らせながら佐奈は文句を言つ。それに巧斗はため息を吐いて、

「解つたよ、だから当分勝手にビビつか行くなよ」

「あはは！ じゃあまた明日あー！」

誤魔化された。あれでいいと思われてこるのは巧斗としても激しく心外だったが、約束しておけば彼女はそれを護るうとするのは確実なので安心といえば安心する。

突然いなくなつても、約束を守る少女なのだ。

少なくとも巧斗と佐奈で交わされた約束が破られたことは一度もなかつたりする。これから先もそうであればいいと巧斗は思つていた。

走り去つて行つた佐奈が校庭の外まで出るのを教室で確認してから、巧斗たちも教室から出る。

「それで？ まじでどこ行くんだよ」

「まずはバー ガーショップだ」

「え？ おいつてくれんの？」

「そんなわけねえだろ」

「たかりかよ。てめえ友達に飯おごつてもうつとか人間性疑つば」

「三秒前のセリフを思い出せ」

学校を出て、緑地公園の方角へ。バーガーショップはすぐ近くにあるので道のり自体は変わらない。昨日と変わらない暑さ、じめじめとした湿気。それによつて汗が鬱陶しい。すぐ近くの「ソンビニ」でアイスを買ってその場をしのぐ。

「なあお前、デジモンとか好きだつたけ」

それは昨日、巧斗が佐奈にも聞いた質問だった。

「ああ？ まあトライアマ持ち歩いてほどでもねえし、家に押入れ漁ればカードも出でてくるだらうが……なんだよ突然」

「いや、トライアマがなきゃいいんだよ」

なければいことは言つても、あればあつたで面白かったかなあとか思つ巧斗である。そして小一時間ほど歩き続け、

「千円分買ひだぞ」

「お前今自分がすごい奇行に走つてるつて解つてる？」

解つてゐるけど必要な事なので仕方ない。確か百円バーガーとは中学生が一人十個、合わせて二十個も買うというのは普通はないだろう。巧斗自身一度の十個食べると言われたら拒絶するだろう。けれど食べるには巧斗ではない。あのオーガモンだ。人間としては奇行でもデジモンだし問題ないだろつ。

つまり自分は悪くない。

理論武装を完了させて、巧斗は凱の分も合わせてハンバーガーが二

十個を注文した。

「……お前、これでつまらないことだったら全裸で縛ってサナと密室に放り込むぞ」

「安心しろ。普段、クールぶつてるお前でもほわあ!?とか寄声上げること間違いなしだ」

「ははは、そんなのあるわけねえだろ」

「ほわあ!?

「ほわあ!?

昨日と変わらない所にいたオーガモンを目撃して凱は寄声を上げた。ついでになぜかオーガモンも同じような声を。野郎が上げても見苦しいだけだった。

「え、なにこれ、本物かよ」

「本物だよ。マジもマジの大マジ。ハンバー ガー『えたらすげえ勢いで喰うぞ』

「ハンバー ガーあるのか!?」

「お、おつ」

「昨日の嘘あるで」

「おっしゃーーー！」

歓喜の声を上げて包み紙を剥く動作もそこそこにかぶりつき始める。損傷しているのが本当でそれの修復のためというのなら解らぬはないが、元々データの存在がタンパク質とか炭水化物とか取つても激しく疑問だ。疑問だがそれは昨夜考えても答えなどでなかつたので置いておく。

「おこタクト、ビビリヒーリーとだよ」つやあ

「ビビリヒーリーとここのは俺も聞きたいんだよなあ」

ハンバーガーに喰らいつき続けるオーガモンから視線を外しながら凱と額を突き合わせる。

「昨日変な声に誘われてここまで来たらいたんだよコレ」

「不思議ちやんキヤフカよ。サナもお前も脳みそどうなつてんだ。電波移すなよ？ 絶対だからな？」

「振りかそれは。電波受信なんかしてないし、受信していたらお前は手遅れだ。俺にはお前とサナくらいしか友達いねえんだから」

「お前言つこへーー白虐ネタあつせつ言つのは、悲しくね？」

全然悲しくない。

しかし昨日から佐奈や凱に対して巧斗も言いにくいことをはつき

りいう奴だと思っていたが、凱も巧斗に対して同じことを思っていた。

基本的に似た者三人組なのだ。

「とにかく。昨日の夜こいつ遭遇してな。デジタルワールドとかいうにも帰れないらしいし、対応に困ってな。とりあえずハンバーガー与えてる」

「それなんも解決になつてねえよ。つか、そんなのなんで俺に言った。ルキさんとかに頼れよ」

「頼つたよ。真っ先に思いついたよ。でも二日前から失踪してるんだとよ」

「彼氏と駆け落ちか」

「知らん」

巧斗としても凱を頼つたのは苦肉の策なのだ。第一候補の牧野留姫が駄目だった時点で候補が消えていた。両親は仕事や家事があるのでダメ。佐奈には関わらせたくない。それ以外に友人はいなくて、知人にはこんなことを見せたら色々問題だ。元々候補に入つていない。だからこそ第一候補にして最終候補である篠谷凱を選択せざるを得なかつたのである。

人が人ならばお涙頂戴ものの話であることに彼は気づいていない。

「だつたら……どうするんだよ」

「だからそれを悩んでるんだ」

頭を抱えながらオーガモンに視線を戻す。

「うめえー！ ハンバーガーやっぱまじうめーーー！」

二十個あつたのが半分にまで減っていた。

「……」

「……とつあべず餌『えとけばい』んじゃね」

「…………ダメだる」

一瞬頷きそうになつたが頑張つて否定した。

繰り返すがデジモンはかつてのデ・リーパー事件で大きな被害を出したのだ。なんとか解決したとはいえた日本中、あるいは世界が混乱に陥つた。このオーガモンがそんな危ない存在だとは巧斗は到底思えないが、それにしたつて何も知らない人々は違うだろ？ 黙つていればなまほげよりもあつかない風貌なのだ。コイツが外を出歩けばこの街一つは大混乱だし、ガチで軍隊とか出てもおかしくない。

「だからほら、なんかいい案だせよ。ホラ」

「お前も大概にいい性格してるよなあ

「褒めるな褒めるな

「ほめてねー」

「おい、もうねえのか

「ねえよ」

「ちえー」

ちえーとかこの鬼が言つても威嚇しているようにしか見えないと
いうかぶつちやけ怖い。

デジコアとかいうのが損傷してこらへるらしいが、巧斗や凱から見ても
外見上の怪我はない。本人は外装だけ修復してとか言つていたが今
はどうなつてているのか。

「全然だなあ。腹は減つてこりまして飯食つて劣化するのがやつとつ
て感じだしよお。なんか他のデジモンいたらロードしてえけど……
この身体だときつこしなあ」

「デジモンにもこりこりあるんだな」

「そこいらへんは人間と変わらない、か」

少なくともルキとその仲間たちは人間とデジモンといつ異なる種
族で絆を生んでいたのだ。人間みたいに色々あるからこそそういう
ことができたのだろう。

しかしとりあえず凱を連れてきたわけなのだが、変わらずに対応策
がない。現状では言葉通りにこりやつて餌を与え続けるしかないの
だ。それはどうかと思つて、

「金が続かない……！」

「中学生に毎日千円消費とか何気に苦痛だよな」

残念ながら巧斗も凱の家も不自由はしていないけど、特別裕福ではない
のだ。精々が中の上かどうか。巧斗の家の実家は結構な名家な
のに母親の性格であまり頼ることは少ない。アルバイトだつて好き
勝手にやることはできず、毎月の小遣いに家事の手伝いで手に入る

駄賃程度。

ぶつちやければ、

「もう十個とか無理だわ。持つて来ても一個な」

「なん、だと……!?」

微妙にオーガモンが小さくなつた氣がする。どんだけ好きなのだ
「コイツは。怒るでもなくマジで落ち込んでいた。

「ま、まあルキ姉……デジモンに詳しい人が来たらその人がどうにか
してくれると思つからさ。それまでなんとか歩けるくらいにはしと
けよ」

「歩くくらいならなんとかなるけどよ……まあ仕方ねえ、のか」

「意外に聞き分けがいいな「コイツ」

「全くぐだ。けれど困る」ではないので、オーガモンに悪いが我慢して
もいかへ。

「まあ、なるべく毎日来るし、お菓子とかなら持つてくれるから。大人し
くしどけよ。人様に迷惑かけるな、掛けたるなら俺にしら」

「うわやだ」の子男前。……なんでそれをサナに見せないんだか

「だまれチンピラ」

「はいはい」

「わりいなあ、巧斗」

「ん？」

ぱつりとオー・ガモンが言った。強面をわずかに申し訳なげに顔をしながら頬を搔いて、

「お前ら人間にもいろいろあるだり? なのにこいつしてもらつてよ。記憶もなんにもねえけど、それくらいの恩義はあるから、俺に」できることがあつたら向でも呟つてくれ」

「……お前」

「」の縁の鬼はまじめにそんなことを言つていた。

なんとなく 留姫が「デジモンのこと」を愛していたのを納得する。彼女ほどの気持ちは解らないがその断片程度には。とにかく純粋なのだ。少なくともこのオー・ガモンは。記憶がどうあれ、悪い奴ではないのだ。

「いひつて、乗りかかった船だよ。気にするんだつたら早く体治して記憶取り戻せよ。それが一番だ」

「ついでの」の友達いないやつの友達にもなつてくれ

「余計なお世話だ」

茶々を入れる凱を小突いて、

「じゃあ、また明日なオー・ガモン」

「んじゃ、わいつ」と、俺も儘にさ来るぜ」

「おひ、待ってるぜ。タクト、かい」

テイキング・ホリデイ

「ああて、デートの時間だよー。」

「それで何買つんだよ今日は」

「あれ、スルー？ つまりデートって認めてくれてるの？」

「買い物に来たんだろうが。デートなんぞ浮ついた単語を使つな」

「なにその古風な感性……」

日曜日だ。先日学校で半強制的に約束された佐奈との買い物に拓斗は来ていた。新宿だ。数年前は戦場になっていたが既に復興は完了し、かつてと同じような賑わいを取り戻している。家族連れやカップルたちが多い。自分たちもそつ見られているのかなとか思いつつ、拓斗は足を進めていた。

「んー最初はどこの行こうかなあ。服か、あと水着とかもいるかな。昼ごはんも食べなきゃだし、夕ごはんはどうつかな」

「戯け、夕方には帰るわ」

「えー」

自分たちは中学生なのだ。基本的に夕飯時刻にまでは帰った方がいいだろう。自分でも些か固いとは思いつつ、相手は放浪癖のある佐奈だ。先週帰つて来たばかりなのに、夜の闇でまた姿を消されても困

る。

「じゃあ適当に服と水着かなあ。タクト、ちゃんと柄が選んでね？」

「はいはい」

「お代はタクトで」

「……物によゐる」

ただでさえ最近はオーガモンのせいで出費激しい。彼と遭遇してから一週間近くたつたわけだが、これまでと変わらずあの森の中に滞在したままだ。本人曰く、普通に動く程度ならばなんとか可能になつたらしいが、激しい動きは無理らしい。拓斗も甲斐甲斐しく食料を届けた成果だろ？。そのせいで今の拓斗はかなりの金欠だ。一応そくりつまりはお年玉の残り 持つてきただが足りるか心配だ。

拓斗は知つている。

女というのは買い物に恐ろしく情熱を掛けるものだと。

元ヤンの母親は言つまでもなく、モデルの叔母、田の前の佐奈もそれは変わらない。従姉は覗く。幼い頃からつき合わされて疲労を極めた回数は少なくない。ちなみに拓斗流の対処術はなるべく逆らわずに時間が過ぐるのを待つことだった。

「よひよひ、まずは服だね」

「はいはい」

こちらの手を取つて率先して進むが、普段佐奈は何時も同じような恰好をしてくる。ホットパンツとタンクトップにフード付きパーカー。フードにファーが付いたり、色が変わったりするが基本的に一緒だ。靴はその日の気分で変わるが今日は編み上げのブーツ。

ボーアッシュな佐奈らしいことばらしいのだな。」

「たまにはタクトの服も買わないよね、こいつも同じ恰好してるのはどうだ？」

「……」

お前に言われたくないと思いつつ、その通りだつたので返す言葉がない。

凱などは色々バリエーション豊富でアクセサリー持ちではあるが、拓斗はかなり無頓着だ。叔母たちが選んでくれたものを着るのが多いので、野暮ったいといつわけではないが。アクセサリー類も持っていない。地味系男子である。とかく目つきが悪いのでそういうを付ける一発で不良と見られるのだ。我ながら洒落つ気など欠片もないがそれが自分というキャラクなのでいいだらう。

なので、

「俺は別にいい」

「えー、せめてなんかアクセでも買おうよ。うんうん、そうしよう。時間は限られてるんだから、指輪か腕輪か、ネックレスかな。なるべく目立つやつがいいよね、解りやすいやつ」

うんうんと水色の髪を揺らしながら佐奈は一人で歩き出していた。

「……参ったな」

ああやつて自己完結した佐奈を止めるのは無理だ。長い付き合いの拓斗は知っている。あの手この手で自分の包囲網を抜け出して目的を達成するのだ。

つまり、

「……なるべく大人しいのしなければなあ」

眩きつつも佐奈の後を追つた。

「ぬあー」

オーガモンは暇を持て余していた。リアルワールドにリアライズしてから同じ場所にい続けているのですつと暇なのだが、特に今日は拓斗が来ない。幼馴染とかいうのとデートらしい。デートがなんなのかはオーガモンは知らない。

「ハンバーガー喰いてえ」

想うのはこれだ。リアライズしてからしか記憶持たないオーガモンにとつて今重要なのは友達である拓斗と凱、それにハンバーガーくらいしかない。食べたいが、それを買うには金がいるらしいし、デジモンであるオーガモンでは買いに行けない。森から出るのは拓斗から止められている。勝手に行つた場合、断ハンバーガーが拓斗から言われているのでオーガモンは動けない。

未だ全身の修復が終わっていないのだからどうせ動きたくても動けないのでが。

「……ん？」

ふとオーガモンは空を見上げた。木々で視界は遮られて、見通しはいいとは言えないが、彼は何を感じていた。

しばらくそのまま固まって、

「……」

目を見開いた。

そして 深緑の鬼は立ち上がる。

「決まりなあ……」

日が少しづつ落ちていく。夏だから完全な日没まで時間はあるが既に六時くらい。そもそも家に帰りたいと思つたが、目の前でフランフラと頭を捻る佐奈は止まる気配はない。昼前から新宿各所を回っているというのに佐奈による拓斗の装飾品探しは一向に終わらなかつた。

流石といつかそういう類のものを探すのには事欠かない街ではあるが、そのせいで選択肢が多くて困る。
佐奈のセンスもどうかと思うが。

「やつぱあの髑髏のフルフェイスが……」

「絶対嫌だ」

悪趣味にもほどがあるだらう。他にもやたらキラキラした腕輪とか日曜朝ヒーローよろしくの変身ベルト的なのとか、トゲトゲのチョーカーとか。もうちょっと考えてほしい。

「やれやれ、タクトの我が儘にも困つたものだよ アイタタタッ!?

ちょ、痛いよタクトー。頭割れる、割れるからー。」

「我が儘はお前だよ……！」

拓斗渾身のアイアンクローデある。

「……つたぐ、俺が付けるものとかいいんだよ。結局お前も何も買ってねえし」

「何言つてるんだいタクト。だからこそ、何か成果がないと帰るに帰れないじゃないか。一日掛けて歩き続けて終わりとかいやだよボクは」

「はいはい。けど次で最後だ。もうそろそろ帰るわ」

「まったく頭が固いねえ……」

「うひせ

言いくじ、変える方向へ足を向けつつ探索を進める。だがそれで簡単に見つかるのならばこいつして一日彷徨つたりはしない。道なりにある大体のショップは回った。そうすると路地裏の目立たない店に行かなければならなくなるわけだが、中学生一人が顔を出せるわけがない。

つまり選択肢はない。

「よし帰らう」

「タクトオオツツ——！」

「ぐはあ!?」

脇腹に抱き付いた意味に強烈なタックルを喰らった。

「まつたく君は… 女の子がプレゼントをするって言つてゐるのにその態度はなんだい? もうちょっと喜ぶなり、嬉しがるなり、僕を抱きしめるなり愛をわざやへなりキスするなりしたりどうだい!? 聞いてる!?

「ぐ、あ……ちょ……痛……」

至近距離で色々叫んでいたが全く聞いていなかつた。痛みでそれどころではない。いくら女子とはいえ全力で脇腹にタックル喰らえばそれは痛い。あまりの痛みに悶絶するレベル。

痛みに絶句する少年とそれに構わず説教始める少女。

それはもう、目立つ。

たつぱり三分もそんな光景が繰り広げられていた。
そしてようやく復活して、

「あ?」

視界の端の路地裏に緑色の影が過つた。

ザ・シンボル

「……つ全く、何故俺がこんなことを……つ」

汗を流し、息を切らせながらも拓斗は蒸し暑い路地裏を走り抜けていく。もうほんの日は落ちているとはいえ夏の暑さは変わらない。寧ろ湿度が高いせいでも汗が滲んで不愉快極まりない。

佐奈との買い物中に見かけた緑色の影。あれはどう考えてもオーガモンだった。あの見た目だけでも子供が泣く外見に加え、デジモンだ。場合によつては大事件になりかねない。だからこそ佐奈を振り払つて、彼を追いかけているのだが、

「見つかっ、ないッ……」

もう既に三十分近く走つているにも関わらず一向にオーガモンは見つからなかつた。実際、一瞬見かけた緑の背中の方向へと走つていいのだから、全然見当違いの方へと向かつてゐる可能性がないわけでもないのだ。呼吸が乱れるのは止まらず、脚もまた止められない。運動が苦手というわけでもないが、得意でもないのだ。昔サッカーに興味があつてやろうとしたが友達がいなくて速攻で止め、今では観戦するくらい。その他のスポーツもやつていないのでからあまり長時間の運動は中々の負担だった。

「つ、はつ、ふつ……」

勿論それで足を止めることはできないが。

そして、それからどのくらい経つたのか。恐らく、愚痴を零してからそれほど経つていなかつたはずだが、いつの間にか日は落ち切つていた。場所も随分と変な所に來たようで、見覚えのなく、人気の薄い

廃工場らしき場所だ。やたら荒廃してこるよつに見えるのはかつてのデ・リーパー事件の被害が直されぬままに残つてこるのであつ。あまり珍しくない場所だが、

「……霧？」

視界の全面を覆う白い靄。霧だよな、と拓斗は思つ。彼がこれまで見てきた霧としては異常なまでに濃いが霧には変わりないだひつ。

「まさか、この中つてことはないだろつな」

正直こんな怪しさ満点の場所に突っ込むのは御免蒙る。御免蒙るが、しかし、

「あいつも怪しき満点だからなあ……仕方なし、か」

どちらにしろ足を止めてこいる暇はない。早急にオーガモンを見つけなければ面倒なことになる。

そう思い、足を一步踏み出しつ

「待ちなよ」

背後から声が掛かつた。

振り返つた先にいたのは幾らか年上であろう少年だった。多分、高

校生くらいだろう。顔つきや表情は暗くて見えないし、体系に関しても全身を覆うような大きなローブのようなもののせいで判断つかなかつた。コスプレか何かだろうか。秋葉ではよく見かけるようだが、見かけない日はないのだが、こんな人気のない場所では流石に驚く。何のコスプレか解らない。

そして、拓斗の田を引いたのは。

暗闇の中で微かな月の光を反射する首に掛けられたゴーグルだった。

「そこから先に進むのはお勧めしないよ」

「……誰だ」

不躾な言葉に思わず口調が荒くなる。年功序列を意外に重用する拓斗だがいきなり変なことを言つ相手に対しては必要ない。

しかし、少年は拓斗の問いかけには答えず、

「そこから先に進むのは、よく解らないメールに自覚抜きにYesって答えること……それよりもよっぽど性質が悪い。君もこの先に何が待つて居るのか勘付いてるだろう? それは間違っていない、だからこそ、君は進まない方がいい。だから、ホラ、家に帰つて御飯でも

……」

「手前勝手なことを轉るなよ、曲者が」

「く、くせものっ?」

拓斗の言葉に訥々と語っていた少年が驚き、雰囲気を崩すが、構わずに言葉を放つ。

「貴様が何を知つて居るかは知らんが、見ず知らずの勝手なことを聞

くと思ったのか？ そもそも、そんな暗い影にいないでもつとこいつら来て
顔を見せろよ」「みう

「……ああ、うん。なるほど氣の強い所はそつくりだなあ」

「聞いているのか」

強めの言葉を放ったのに何故か苦笑されたから微妙に腹立たしかつた。

一体なにが面白いと云うのか。咳きも小さくて聞こえなかつたし。
結局その少年は立ち位置を変えないままだ。

「じゃあ聞こいつ。なんで行くんだい？」この先はどう見ても怪しい
し、実際危険がある

「危険がある、だからはいそぐですかと引き下がれるか。生憎友達が
一人この先にいるようだから、危険があるのならば猶更進み、首
根つこひつつかんで連れ戻す必要がある

「君にその危険は降りかかるよ？」

「構うものかよ」

少なくとも。

拓斗は嘘をついていいない。拓斗が想像、想定しうるあらゆる危険があつたとしても、彼はそれに対して立ち向かい、オーガモンを連れ戻すつもりでいた。

「……そうかい。言って聞く様な性質じゃなかつたか。余計なお世話
だつた……といつよりも、単純に無粋だつたらしいね。行きなよ」

「言われなくとも」

そのまま首を向けようとした。したが、

「これ、持つていきなよ」

少年から何かを投げ、反射的にそれを掴んだ。

何かではなく、ゴーグルだった。今しがた、少年が嵌めていたものだった。

「……どういうつもりだ」

「餓別、かな。その中視界が悪いからね、サングラスとかゴーグル付けてた方がおススメだよ。……それにまあ、今の僕にそれは相応しくないしね」

「……何時返せばいい」

「いつでも。いつかまた会った時に、君と僕、そのゴーグルに相応しい方が持てばいい」

「ゴーグルがそんな重要なアイテムだとは……」

「そういうジンクスがあるんだよ。ほら、僕からはもう終わりさ。邪魔して悪かったね」

いきなり足をとめさせたと思ったたら、進むように促すこれは何なのだろう。正直腹が立たないでもなかつたが、見ず知らずの変なコスプレイヤーよりもオーガモンの方が重要だ。だから今度こそ少年に背を向け、走り出していた。無論、受け取ったゴーグルを装着して。

「礼は言つておく

「……」

霧の中に消えていった牧野拓斗の背中を松田啓人は無言で見送った。やがて拓斗が完全に霧の中に消えた後、背後から新たな影が現れる。

「タカト、本当によかつたの？」

それは人ではない。もしもそこに誰か一般人がいたのならば悲鳴か歎声を上げていただろう。真っ赤な恐竜。全長は啓人とそれほど変わらないほど。悲鳴を上げるのならば見た通りの外見に。歎声を上げるのならばそれぞれの記憶に。

ギルモン。

かつてデ・リーパー事件を戦い抜いたデジモンの一体であり、松田啓人もまたそのティーマーだ。

「いいんだよ、ギルモン。あの一人にはもう絆がある。デジヴァイスもすぐに手に入れるだろしね。今更割つてはいるのは無粋だよ」

「違う、そうじゃないタカト。あのオーガモンは

「それも、解つてる。解つてるさギルモン。解つてるからこそだよ。ま、僕も止めるつもりだったけれど、実際に会う考えが変わった。ル

キをさらに頑固くしたよつな子だったじゃないか、止めるのならば、一人が出会い前に止めるべきだったんだ

「……タカトがいいなら、ギルモンはそれでいい」

「ありがとう。僕らも行こうか、どうなるにじり見回ける必要はあるからね」

「うん」

そうして一人と一体はその場から去る。

一歩、二歩と共に足を揃え、進み 三歩田には一人分の甲冑の音を鳴らしながら。

その背には、薄暗い蒼のマントを棚引かせて。

ファースト・エヴァオリューション

霧が晴れた先には牧野拓斗が予想もしていなかつた世界が広がつていた。

「……なん、だこれは」

田を覆つていた「ゴーグルを額に押し上げながら、無意識に言葉を零す。動悸は気づかぬうちに加速し、全身から滲む汗もまた増えていき、そしてそのことに気付く余裕すらもない。年不相応に落ち着いている拓斗でさえもその光景を前にして平静を装つことはできなかつたのだ。

そこは戦場、或は地獄だつた。

拓斗が知つている言葉では、そう表現するのが精一杯。廃工場、だつたのだろう。少なくとも此処に至るまで、霧のせいで視界は悪かつたがそういう雰囲気だつた。けれど今は違う。決定的に違つてゐる。目茶苦茶なのだ。建造物や地面、霧が晴れた空間全域に至るまで全てが亀裂が入つたり、何か鋭い物で斬り裂かれたようになつてゐる。デ・リーパー事件の痕などではない。明らかについ最近、それどころか今さつきできたような生の破壊痕。

それらの情報は拓斗の思考を止めるには十分だつた。

「つ……」

喉が引きつり、忘我から抜け出す。そして気づく、亀裂や大穴が開いた地面、この謎の空間の中心部に縁の鬼が倒れていふのを。

「オーガモンッ！」

動かないオーガモンへと駆け寄る。うつ伏せに倒れ伏す姿は傷だらけだ。始めて会った時に比べればまだましたが、それでも緑の肌に赤い血で染められている。巨体を抱え、仰向けにすれば、意識は胡乱ながらも残っていた。

「タク、ト、? なんで、おめえが」

「それは」うちの台詞だ、一体ここで何が

あふねえッ！」

問い合わせる前に胸を突き飛ばされた。

ガツ!?

小さくない痛みと共に肺から空気が押し出されながら身体が飛ぶ。

メートルは飛んでいた。

そしてそれが、拓斗の命を救つたのである。

۷

オーガモンの押しのけで吹き飛んだ拓斗の身体。そして彼がそれまでいた場所に大きな塊が落ちてきたのだ。
ただの塊ではなかつた。

「クワガタの、化物……？」

地面を転がり、土埃塗れになつた拓斗が見たのは巨大なクワガタのような化物だったのだ。そこら辺の工場と変わらない巨大な体高。鈍い灰色のボディ、鋭利な顎牙。それらを支える四本足。

クワガタの化物。

まさしくそう形容すべき怪獣。

けれど拓斗は従姉の影響故に、その化物の名を知つていた。

「……オオ、クワモン」

オオクワモン完全体ウイルス種昆虫型デジモン。牧野留姫からかつて叩き込まれた経験からその知識を浮かび上がらせていた。

「つ、あ……」

知識は確かに持つている。けれど今、そんなものに何の意味もなかつた。

完全体。

デジモンの状態としては基本的に六段階ある中でも上から一つ目。デジモンとしての戦闘力は高く、その中でもオオクワモンの闘争本能は極めて高い部類。拓斗は知らないが、かつて東京に現れた完全体デジモンの何体は街に大きな被害を与え、中には壊滅にまで追い込んだ者もいた。そんな化物が、目の前にいるのだ。

ただの中学生一人にどうにかできるものではない。

「逃げろ、タクトッ！」

「！」

果然自失となつた拓斗をまたもや救つたのはオーガモンの声だつた。

オオクワモンの足元、今の着地の衝撃でさらに満身創痍になりながら

らも必死の形相で拓斗の身を案じていた。

「うう……」

耳が痛いほどに動悸は鳴り響く、息を呑む音さえもがうるさい。恐怖と緊張が鉛のように全身を支配している。本音を言えれば今すぐにでも逃げ出したかったし、逃げ出すべきだった。警察なり何なりに通報するのが最善の選択だった。

だが、それでも。

「……ざけん、な」

それができるほど牧野拓斗は利口ではない。

「ダチ見捨て自分だけ安全などこ行けるかよーッ！」

傷そのものは大したことない。そのあたりに転がっていた石ころを拾い上げ、オオクワモンへと投げつける。

「キシャア？」

そこで始めてオオクワモンは拓斗の存在に気づいたように視線を向けた。

睨まれただけでも足がすくみそうになるのを、気合いでねじ伏せつつ、

「うちだ害虫！」

叫び、意識を引く。大きく迂回するようオオクワモンの周囲を走りだした。

「馬鹿野郎、なにやつてんだ！」

「うるせえお前もさつさと逃げる死にかけが！ 大体こんなところで何してたんだよ…」

「デジモンの気配が会つたからやべえと思つて来たんだよ！」

「俺に話してからにしろ！」

「凯がお前はアメとかいうのとアートだから邪魔するなよとか言われてたんだよー。」

「凱イー！」

「ウタカタの日記」

「九」

コントをしている場合ではなかつた。

煩わしいと言わんばかりに全身を震わせるオオクワモンに思い切り吹き飛ばされる。翅の羽ばたきも含めたスピンドルアタック。いや、攻撃ではなく纏わりつく「」を払つた程度の動きでしかなかつたのだろう。しかし、それだけでも拓斗やオーガモンを吹き飛ばすのに十分過ぎる。

「ガツ！ ゴホツ、ゴホツ……ああ、クソつ」

激突した工場の壁はコンクリートではなく、プレパブの類だつたらしく壁を突き破り廃工場の中に転がり込む。舌に鉄の味が広がつ

いるのは、口の中を切つたらしい。吐き捨て、拭いながら立ち上がる。身体そのものへのダメージは薄かつたのが幸いだ。外の光景は舞い上がった土煙で何も見えない。

ふらつきながらも外に出ようとして、

一
あ

土煙から突っ込んできたオオクワモン、それが振り回した牙が拓斗の身体を掠めた。

直撃ではなく掠めただけ。

それでも、再び拓斗の身体を吹き飛ばし、致命傷を与えるだけには過剰過ぎる。

掠めたオオクワモンの体はあまりにせき氣なく拓斗の腹部の肉を切り裂き、内臓にまで尋常ではないダメージを与え、塵のように吹き飛ばした。

「あ……が、そこ……」

地面に転がり、漏れるのは声にならない血混じりのうめき声だけ。口の中を切つたどころではない。全身が血に染まり、痛覚すら振り切つた激痛が全身を蝕んでいる。視界が赤熱してよく解らないが、内臓もはみ出しているに違いない。

「タク、ア……」

擦り切れた聴覚に届いたのは回ഴじようにして傷ついたオーガモンだった。先ほどの回転の時点で、いやそもそもが歩くのがやつの重体の身だったのだ。完全体と僅かでも対峙したというだけでも僥倖だ。テスクチャは崩壊しけ、サインフレームや「デジ」ロアにすらも尋常ではないダメージを受けている。

最早本能で理解してしまつ。もつ、死が間近である」とを。

「……、う、あ……」

覚悟がなかつたわけではない。

寧ろ年不相応なまでに彼は危険に対しての覚悟を持つていた。足りなかつたのは見通しだ。

謎の空間の先に完全体デジモンといつ死の具現がそこにはいるということを予想できなかつた。

そんなことができるわけがない。それは言い訳だと拓斗は思う。かつてのデ・リーパー事件、それを乗り越えた留姫たちの失踪、そしてオーガモンとの出会い。

今何か異常事態があればデジモンに関連あると考えて然るべきだつた。

何もかも、牧野拓斗が甘かつたといつだけ。死に体であるオーガモンが異変に走つたというにも、何一つ生かすことはできなかつた。その不手際の付けが今、死といつ形で迫つていた。

「いや、だ」

声にならない声が発したのは、そんな拒絶の声だつた。込められたのはオオクワモン、この理不尽な状況に対する怒り。無様にも容易く殺されかけた口への不甲斐なさ。

そして何より、死への恐怖。

「死に、たくないッ」

牧野拓斗は所詮中学生の子供でしかない。死を前にして恐怖するなど誰が言えるというのか。

脳裏に過るのは、これまで関わってきた人たち。

「父さん、母さん、叔母さん、ルキ姉……凱

他にも他にも、色々な人達。碌に友達のいない拓斗であっても沢山の人との絆を得ることができた。なのに、それをこんな所で、

「終わり、たくない……」

終りたくない。

死にたくない。

こんな様で自分の生が消されてしまつなんて納得いかない。

絶死の領域故に今の拓斗を占める想いを限りなく純粋で極まつている。

「……ッ」

口から血の塊が吐き出された。場にそぐわぬ電子メロディが響いた。

「……うあ？」

視線の先にあつたのは拓斗自身の携帯だつた。いつの間に吹き飛んでいたのか、ポケットに入っていたはずのスマートフォンが奇跡的に無事だつたらしく、飛び出していた。響いた電子音には聞き覚えが

あつた。幼馴染の少女が勝手に着信音を決めて、勝手に外さないよう
にした少し前に流行ったポップソングだ。

「……あ」

聞こえてきたそれに、身体が動く。血を流しながら、這いつくばり、
スマートフォンへと手を伸ばす。視界はもう碌に聞かないが、聞きな
れたその音楽だけは理解できた。

「あ……な」

芋虫のように無様に這いながら、鳴りやまぬ携帯へと手を伸ばす。
あの少女は、きっと拓斗が姿を消してからずつと探していたのだろ
う。

「わ……な……」

「タク、トッ」

死に体の身体で、それでも生を渴望するその姿を、オーガモンも見
ていた。それには彼も既視感を覚えずにはいられない。なぜならば
その姿は、オーガモンの記憶にある限りの自分と同じだったのだから。

「わな……ッ」

「ああ、そうだ……」

「そう。

終れないのはオーガモンもまた同じだ。」

「終れる、かよ……ッ」

を殺し忽くすまでも口は終わらない。終われないのだ。そのデジコアに染みついた怨念と憎悪が終わらせはしない。故に、この場でどうすれば生き残れるのか。

オーガモンはその答えを知っていて、無意識にそれを果たすために、彼もまた拓斗のスマートフォンへと手を伸ばしていた。

「佐奈……」

「まだだ……」

「死にたくない……」

「まだ、足りない……」

「帰りたい……」

「倒すんだ……」

『——こんな所で、終われねえッ！』

そして。

重なり合つた想いと共に、牧野拓斗とオーガモンの手もまた重なる。

手の下で、スマートフォンは形を変え。

液晶画面には青く染まり

デジタルゾーンをぶち抜いて、秋葉原の街にどす黒い縁の光の柱が起立した。それは誰もが目撃したが、その意味を理解できたのは片手の指でも足りたであろう。

そしてそれを正面で叩撃したオオクワモンはよく解つていなかつた。

しかし現実として、死にそこないだったはずの人間一人とデジモン一体。それが消えていた。代わりにいたのは、

「」

縁の鬼。

発達した筋肉で体を包み、無骨な手甲や脚甲を装着していた。身長一メートルほどだが、それでもまだオオクワモンからすれば小さい。その鬼は不気味なくらいに静かに佇んでいた。

「キシャアツ」

不審がるようすにオオクワモンが威嚇するがそれすらも反応がないように、見えた。

「……」

ギロリと、その血走った深紅の目が見開かれむ。

その眼光に思わずオオクワモンは四足を後ずさり、そのことに少なからず動搖する。オオクワモンはデジモンの中でも極めて凶暴な性質を持つている。例え相手が格上であろうとも、問答無用で襲い掛かるくらいには気性が激しい。

そのオオクワモンがただ睨まれただけで気圧されるといつ事実は本来ならば在りえないことだった。

「キシャアアアアアアアアアアアア!!」

故にそれを誤魔化すようにオオクワモンは鬼へと腕を叩き込んだ。それだけで車一つは粉々にするであろうだけの威力があった。

にも関わらず、

「……」

「キシャアア?!」

緑の鬼は右腕一つでその一撃を受け止めていた。
否、受け止めるだけではなく、

「フンー！」

その腕を引き込み、その固く握りしめられた拳をオオクワモンの腹部へと叩き込んでいた。

「シャアアアアアアアアアアアア?!」

めり込んだその一撃は灰色の甲殻を砕き、緑色の体液をまき散らす。

そしてそれで終わらない。右の拳を引き抜き、また同じように左拳をぶち込んでオオクワモンを吹き飛ばした。

「グウ……」

血走った瞳のままに鬼は息を漏らす。そのまま無言でオオクワモンへと足を進めていた。当然オオクワモンもまた転がっているだけではない。その翅を広げ、高く飛び上がり、その顎の牙に光を灯す。

「シャアアアアアアアアアアアアツツツ!!」

『シザーアームズ。』

その必殺の牙にてダイヤモンドすら紙のように容易く斬り裂く必殺技。事実リアルワールドに来るまでデジタルワールドで多くのデジモンをロードしてきた。それをむしに、デジタルゾーン内の高さギリギリまで舞い上がり叩き込む。先ほどの腕の一撃や、オーガモンや拓斗に放つたものとは比べ物にならず、何倍、何十倍もの威力を内包していた。

それでも 、

「グオ……！」

深緑の鬼は揺らがない。

それどころか、輝く牙を両手で完全に受け止めていた。手の平からは微かに血が滲み、受け止めた衝撃で足元の大地には亀裂が入つている。

それでもそれだけ。

完全体デジモンの渾身の一撃をたつたそれだけのダメージで済ませ、さらに、

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

絶叫と共にその顎の牙を引き裂いた。牙から頭部の甲殻まで完全に裂かれ、しかしそれでも鬼は止まらない。

雄叫びと共に拳を何度も叩き込む。

十回や二十回では済まされない。オオクワモンが既に絶命し、そのテスクチャが分解され始めているにも関わらず、執拗に両拳を振りあらす。

まるで決して許せない仇の怨恨

それがなんであるか、この場にいる誰も知らない。

幾千の無為。

幾千の愛憎。
幾万の死著。

百の戦場

百の言葉

幾万の呪怨が。
幾千の呪言が。
幾百の夢想が。
幾十の幻想が。
唯一の理想が。

鬼修羅を創造する。

それはそうして生まれてきたものだ。

ただひたすらに憎悪と執念と狂気だけがその鬼修羅を創り出して
いる。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオ——ツツツ!!!!」

原型すら失ったオオクワモンは為す術もなくデータへと帰り、鬼修
羅へとロードされる。

それが深緑の鬼修羅　　タイタモンと牧野拓斗の歩むの修羅道始
まりだつた。

シンキング・アトモスフィア

それは血と屍で作られ、憎しみと悲しみが込められた道だった。

幾万の不遇。

幾千の無為。

幾万の死者。

幾千の愛憎。

百の戦場。

十の霸者。

百の懺悔。

十の諧謔。

幾万の呪怨が。

幾千の呪言が。

幾百の夢想が。

五十の幻想が。

唯一の理想が。

それは〇と1で形成されたデータだから生易しいといつわけではない。寧ろ、データという純粹な情報の塊であるからこそより凄惨で、より悲惨だった。そこに生産性など欠片もない。絶望的なまでに破滅にしか至らない。屍山血河、屍人でできた道のり。

一步踏み出せば抜かるんだ血が。

もう一步進めば屍の骸が。

さらに行けば誰かの得物の残骸が。

進めば進むほど、行けば行くほど。足に何かが絡みついて歩みを重くしていく。

けれど止まることはできない。例えどれだけ纏わりつくものが重くても、そこに込められた怨念と絶望が止めることを許さない。

そう、もう止まることはできないのだ。

一度足を踏み出し、その屍たちが遺したものを持ってしまったが

故、止まるという選択肢はない。許されているのは、力の限り進むこと。そして力尽きた時に、自身もまた死者の軍勢に加わるというだけ。

終わりなど見えない。

あるのやもしれない。

意味があるのかも解らない。

けれど進むしかない。

もう、己だけの身体ではないのだから。

その背に、魂に、幾千幾万の怨念が染みついているのだから。

故にそれこそが 鬼修羅である。

「 ッツ！」

痛みすら伴う意識の覚醒だった。

早鐘のように鼓動を刻む心臓、頭からバケツの水でも被つたように汗で濡れた身体。鼓動と汗、痛みと不快感、そして唐突な目覚めが牧野拓斗の五感を支配していた。自分が今どこでなにをしているのかすらも解らず、新鮮な酸素を求める体の本能に従いただ荒い呼吸を繰り返していた。

呼吸を整えるのにたっぷり数分は要し、そこでようやく周囲に目を向ける余裕ができた。

「……俺の、部屋……？」

未だ焦点がはつきりしない視界で移るのは見慣れた自室だ。かなり薄暗いが、もう少しひと使つていい部屋なのだ。解らないわけがない。

時計を見れば午後十時を少し過ぎたくらい。

こんな変な時間に何故田が覚めたのかを考え、記憶を探り、

「……！」

鬼修羅としての記憶が回帰した。

「あぐあ……つ、う……！」

嗚咽と共に喉の奥からこみ上げるものがあり、倒れ込むように這いつくばりながらベッドの脇にある「ミミ箱」の下へ。

「おえーーーっ！」

胃の中の中身全てをぶちまける。

吸えた匂いや鼻の奥でシンとした痛みが広がるが、それにも構わず吐き続ける。胃が空っぽになつた後からも胃液すら吐きだしていく。

「ハッ！、グ、っハー、ハーッ……」

よつやく吐瀉物が収まつてから分泌された唾液で口の中を可能な限り洗いつつ、ティッシュで汚れた口元を拭う。盛大に吐いたせいで体力を使い、また荒くなつた息を整えるのに苦労し、

「……あ？」

扉にもたれたオーガモンに気付く。静かに眠つているようで、動か

ないままだ。

その姿を見て思つ」とは一つ。

「……なんで、ここにいるんだ？」

記憶は最悪なことに鮮明だ。

拓斗とオーガモン。人間とデジモンという異なる種族二人が合体し、鬼修羅へと変貌していた。ハッキリと覚えている。デジモンとなつてオオクワモンを蹂躪したこと、その直前死に至るはずの傷を負っていたことも。

あの時の吐き気や痛みだつて残つていて、それを思い出しかけまた吐きそうになる。

深呼吸を繰り返し、頭の中を落ち着かせた。無論あの時の記憶がそんな簡単に鎮静化するはずもなく、十分以上それだけを行つても結局精神が均衡を保てるはずもなかつた。

「ああくそ……お起さうオーガモン」

「」

「オーガモン！」

「つ、ぐ……ん、お……？ タク、トか？」

オーガモンは頭を何度も揺らしたが、確かに意識を取り戻した。

「俺は……！」

「俺の部屋だ」

「タクトの部屋……なんでこんなところに」

「俺も知らん」

疑問はそこだ。

拓斗とオーガモンは融合し鬼修羅となつた時の記憶ははつきりと覚えている。だが同時にオオクワモンを斃した後から先は全くない。壊れた映像記録のようにぶつつりと切れている。そして次の記憶は、今こうしてこの部屋で田覚めた所だった。

まさか自分で、あの姿のままに帰つて来たわけがあるまい。

「……解せぬ。これに關してはいくら考へても解さんか」

ならば、考へるべしことは、

「……俺とお前、合体？ 融合？ 進化したよな」

「……ああ

響いたはずだつた。

拓斗自身は知らないが、本来は『子宮』を意味するラテン語。転じて生み出すという概念を持つ言葉だ。それ以外にも数学における数列で使われることもある。エヴォリューションは拓斗、といづりも大体の日本人でも知っている通りに進化だ。

その英語に拓斗は聞き覚えがあつた。

デ・リーパー事件、その時に戦つた留姫たちがデジモンと融合する時に彼らの持つ機械からそんな音が鳴り、テレビ等にも乗せられていた。原義的にはともかく、解り易くすれば融合進化といったところか。

「それが俺たちにも……む

そこでポケットにスマートフォンが入っていることに気が付く。あの時のさくさく紛れて壊れたり失くしてもおかしくなかつたが、どういう訳か壊れていなままにポケットに入っていた。いや、壊れていないといつよりも、

「変わつて、る」

それまで拓斗が使っていた時より大分無骨というか物々しいし、濃い緑と黒の骨らしきデザインになつていて。電源を付ければそれで使つていたスマートフォンとデータやアプリに違ひはないが、デスクトップはフォーマットらしき真っ青な画面だ。着信通知のライトが点滅していたが今は無視だ。

そしてもう一つ。

ダウンロードした覚えのないアプリが一つだけ入つていた。

「おいタクト、何見てるんだ？　おい？」

「……」

オーガモンが声を上げるが気づいていなかつた。というよりも反応が面倒だつたし、その見慣れぬアプリがそれだけ興味深いものだつた。

恐竜のよつなドット絵をクリックすれば表示されたのは同じようにドット絵となつたオーガモン。何やらノイズ混じりなのが気になつたがそれ以外にも視線を移す。ホームらしき画面に、下部にはいくつかのアイコンがあり、『pictorial』と書かれたところをタップすれば、

「これは……図鑑、か？」

「デジモンの名前らしきものがずらりと並んでいた。ア行から順番に始まっているそれは大体百あるかないかといった感じだ。

「む、91、これが記されている数か？ デジモンの数はどうほじたか……」

そのままインターネットに接続し、デジモンで検索する。大体デリーパー事件のせいで色々なゴシップ記事が多いが、やはり一番上に来るのはWikpediaだ。そこによれば諸説あるが大体は千前後らしい。つまり十分の一くらいがあるということか。

「……ぬう、知らない名前が多いが、記入有無の差が解らんな。おい、オーガモン此処に載つてる名前知つてるか？」

「ああ……？ あー、なんか覚えはあるな。技とか戦い方とか名前は出でるぜ」「さあ

「お前が知つてるけどない名前はあるか？」

「……解んねえな」

「そうか」

恐らくだが、オーガモンの知識 或はデータ とリンクしているのだろう。ホームでオーガモンの絵にノイズが多いのはそれだけ彼の身体のダメージが大きいということだと考えられる。
つまり これはそういうことだ。

「ティマー、か

「デジモンティマー。」

牧野留姫をはじめとしたかつての戦いの英雄たち。彼らはそう呼ばれ、そう名乗っていた。拓斗自身、留姫から直接聞いていた。

それに拓斗もまたなつたということだらう。

「おーい拓斗、なんだよお前、聞いてんのかー？」

「いや、問題しかない」

彼らは端末のようなものを使っていたから、拓斗のこれも似たようなものだと思つ。新しいカバーを買つたとでも言えば問題ないだろう。

「いや、問題しかない」

ティマーというのは「テジモン」と一心同体の間柄であるということは留姫から聞いていたし、現に今更オーガモンを放置するなんてことはできない。確固たる理由などないが、今の拓斗は自然とそう思つていた。

だから今の段階における問題としては、

「お前をどう扱う扱いにするか、だな」

「ああ？」

当たり前のことがオーガモンは目立つ。こんなでかい緑の鬼なんて目立たないわけがない。だからこそ出逢つてからあの森に押し込んで不自由をさせていた。だがこうしてティマーという繋がりができる以上、あんな扱いはできない。

だがそれにして、

「家に居候させるのも現実的ではないか……」

「いろいろアバウトと云ふ大らかな拓斗の母と云えども、こんな鬼を家に引き入れるなんてことほんりえないだろ。ところが受け入れたらちよと母の専識を疑う。

「ぬーぬぬ」

「タクト、ねこ、ねーーー」

「……ぬっ」

「ナツ、ゆっこ、ばい」

「……ふうむ」

考え込んでいた拓斗だが、普段の彼ならばオーガモンがふりつきながらも自室から出て行つたことに気づいただろ。それでも今の拓斗にはそれだけの余裕など欠片もなかつた。それなりに平静を取り戻し、冷静に審察してこねようにも見えぬがしかし実際のところ全くもつて平常の状態を取り戻してはいなかつた。

故にオーガモンに気付かず、それまで近づくあつた用済佐奈の着信にも気づけないまま、彼女からかかつてきた着信に応答した。

『タクト、ぬこ、ばい、ぬーーー』
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお
おおおおおおおお
おおおおお
おおおお
おおお
おお
お

「うううううううううううううううううううううう
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおお
おおおお
おお
お

କାହାରେ କାହାରେ କାହାରେ କାହାରେ କାହାରେ କାହାରେ ?!?!?!

スマートフォンから轟いた佐奈の絶叫に拓斗は思わずひっくり返った。

『君は… ビーで… 一体！ 何を！ していたんだ！ 君は今ビーに何なんだよおーーー』

「ちよ、おま、一度、静かに」

『静かに!? 君の! 頭はー 空っぽなのか!? いきなり! いなく
なつた! 君がー みづせづくー 出たといつのー 落ち着いてら
れるかあーーー』

「み、耳が……果てる……」

馬鹿みたいに大きな佐奈の声、それが拓斗の鼓膜に直撃し頭の中が
ガンガン殴りつけられる。

疲労も相まって、ふとちやけ吐きそう。

「お前ホントに芝

思わず怒鳴りそうになつたが、

『ほんとに、心配したんだよ』

涙混じりの

「……すまん」

『ぐすつ……どこでなにをしてたのさ。ボクは君のこと凄い探して、

ガイに電話してパシラせて、それでも見つからなかつたつていうのに

何やら凱の扱いが酷いがどうでもいいことなので置いておいて、考えるべきは佐奈への言い訳。長い付き合いで。下手な言い訳をすればばれるのは瞭然なので、ばれない嘘をつかなければならぬ。

「あー、まあなんといつかいるはずのない知り合いを見かけたから思わず追いかけてたら道に迷つてな」

『嘘だつ!!』

速攻否定である。

『タクトにボクとガイ以外の知り合いなんているはずがない!』

「そこかよ!」

いや確かに友達がいないのは否定できないし、数少ない友達はその一人しかいないが、それにしたって顔見知りレベルならば少しくらいいる。

多分、きっと、めいびー、そうだといいな。

「とにかく、まあそういうことだ。俺は無事だ、現にこうして自分の部屋でくつろいでる。心配懸けて悪かつたな」

『』

返事は数秒の間なにも帰つてこなかつた。

別に嘘を言つてゐるわけではないが、それにしても怪しいことは怪しい。どう言い訳したものかなと考え始めたが、

『解つたよ、うん。今回は、君が無事だった』とを喜ぼう。

本当に

大丈夫なんだね?』

「お、お~。特に問題はない」

『……なら、いいや。うん』

「……」

『……しかもなくしおらしい、或は素直な雰囲気に思わず感づ。自由奔放を絵に描いたような幼馴染がこんな風になるのは滅多にない。多分数えるほどしかなかつたはずだ。』

「サナ? なんかあつたのか?」

『……それはこいつちの台詞なんだけど。とりあえず、君が無事でよかつた。また明日会おうね』

「あ、お~つ……切れたか」

『……いつになく様子がおかしかつた気がするが、タクトも人のことを言えない。』

彼女のことを思い浮かべ、

『わ……な……』

「つ……」

同時、あの絶死の状況に於いて最後に読んだ名前が彼女だつたことを思い出し、顔が赤くなりそうになつたり、恥ずかつたり、形容し難

い感情が湧き上がつてきたり、とにかく色々一杯一杯になりつつも、オーガモンへと視線を向け　そこでようやく彼がないことに気づき、

下の階から響くパートナーと母親の叫び声に頭を抱える他なかつた。

「……勘弁してくれ」